【8】

氏　名（本　籍）	周（しゅう）　馥（ふつ）　卿（きょう）（英国）
学位の種類	文　学　博　士
学位記番号	博　甲　第　327　号
学位授与年月日	昭和61年 3 月25日
学位授与の要件	学位規則第五条第１項該当
審査研究科	文芸・言語研究科
学位論文題目	日本語の条件表現とモダリティ――言語行動の枠組における研究――
主　査	筑波大学教授　寺　村　秀　夫
副　査	筑波大学教授　PHh. D.　草　薙　裕
副　査	筑波大学教授　芳　賀　純
副　査	筑波大学教授　文学博士　北　原　保　雄

論　文　の　要　旨

日本語における条件表現は多くの研究者により研究されてきた。それらの研究は，「条件」の意味を厳密に規定したものは少なく，条件節と主節の関係から，既定条件，仮定条件，確定条件，因果関係を表わす条件，前後関係を表わす条件，あるいは，完了対未了，実際的対論理的，一般的対個別的，といった解釈がなされている。しかし，ト，タラ，バ，ナラなどの表現の相互互換性やニュアンスの違いなどを外国人の学習者に理解させるためにはまだ決定的な要因は解明されたとは言い難い。

周氏は，文の意味に常に事柄を表わす部分と言語主体の態度を表わす部分があり，日本語の文法と意味の接点に言語主体の態度の次元が深く拘わっていることに着目し，この観点から日本語の条件表現を解明している。論文の構成は次の通りである（ワードプロセッサー印刷 256 頁――400 字詰約 680 枚相当）。

0　序論

1　日本語の「条件表現」における問題点

　1－1　「条件表現」の定義

　1－2　「条件表現」の範囲

　1－3　「条件表現」と事実性・現実性

　1－4　「条件表現」と関係付けと主観性

1－5　「条件表現」とディスコース

2　現在までの研究について

2－1　森田良行の考察

2－2　宮島達夫の考察

2－3　久野暲の考察

3　文の意味とモダリティ

3－1　文の意味に関する二つの側面

3－2　日本の文法家による研究

3－3　林四郎の研究

4　文の機能と発話行為

4－1　文の機能と発話行為理論の背景

4－2　Austinの理論

4－3　Searleの理論

4－4　Katzの理論

5　言語行動

5－1　文の意味と文の機能の接点

5－2　言語行動の枠組み

6　言語行動の枠組みにおける条件表現

6－1　叙実型

6－2　認定型

6－3　表出型

6－4　指示型

7　結論

1では，条件表現における定義，分析範囲，事実性・実現性，関係づけ，ディスコースとの関係などの問題点を論じている。2では現在までの研究のいくつかをとりあげ，それらが，1で論じた問題点をはっきりさせないまま，また枠組みがないまま研究をすすめたことから生じる矛盾やレベルの混同を指摘する。

3では，事柄に対するものと言語主体の態度に対するものという文の意味に関する二つの側面を問題にする陳述論を検討し，それがほとんど文末の助動詞を中心にしたものであり，文中に現れる接続助詞については論じられていないことを明らかにしている。

4では，Austinの発話行為論，およびその理論を展開したSearleとKatzの論を検討することで，文の意味を機能の面から考察し，また文の機能と発話行為とがいかにかかわるかを論じている。

5では，それまでの考察から，文の構造や意味の解明には，文に関する意味と機能という二つの側面は切り離せないもので，同時に考慮しなければならないとし，それが重なっている部分が言語主体の態度だと主張する。そして，これが意味の分析では，モダリティであり，機能の分析では表

現内行為の「力」(表現意図) だと考える。そして，条件文の意味の分析・記述の解明のために，表現内行為の「力」を叙実，認定，表出，指示の類型にまとめ，また言語主体の態度を，事柄めあての認定，事柄めあての態度，言語主体めあての態度，相手めあての態度を考えたモデルを提唱している。

6では，上記のモデルを用いて，日本語の条件文を分析し，類型別に分け，同じ類型に属する文の接続に当たるモダリティの高低を示している。

さらに，1) 接続助詞にも陳述の力があることが証明できた，2) 本論文のモデルによる分析によって，条件表現が性質の違う，描写，仮定条件，前提条件，という三種類の表現に分けることができる，3) このモデルはAustinのいうConstatives(言明の表現) とperformatives(発話行動) を同じ意味の基準から分けることを可能にしモダリティの低い類型の文がConstativeである，という結論に達している。

審　査　の　要　旨

数多くある日本語の条件表現の研究の中にあって，本論文は極めてユニークな研究である。従来の研究は条件文の前件と後件との関係を分析し接続助詞の意味を記述したものがほとんどであるのに対し，周氏はまず文全体に対する言語主体の態度をとらえた上で条件文の前件に対する言語主体の態度を分析している。従来の研究の知見をたとえば日本語教育の現場で利用すると，同じ外的条件における異なる接続助詞の使用やニュアンスの違いなどの説明が非常に困難である。外国人である周氏がそこに目をつけ，言語における文の機能，とりわけ言語主体の態度（モダリティ）を出発点として日本語の条件表現の解明を試みた功績は大きい。

また，日本語の条件表現を解明する手段として，条件表現のみならず，他の関連表現（テ，ルトキ，タアト，ルバアイなど）との比較を行っており，これが研究の視点を広げている。

周氏は数多くの資料を集め（日本語の条件文の分析にかかわる例文数約460)，それを克明に分析しており，日本語に対する言語直観は非常に正確であり，インフォーマント（言語の情報提供者）を非常に上手に使いこなしたことを示している。その点でも本論文が労作だと言える。

あえて問題点をあげれば，前半の部分は引用などに無駄なところがあり，もう少し簡潔に表現したほうがよいと思われる箇所がある。また，条件表現の分析に文全体に対する言語主体の態度から入ったのは前述の通りこの論文の特徴だが，条件表現の中にはそれを使わないほうがいいようなものもあり，関連表現の分析も含めて今後の研究に期待するところである。本論文では明確に定義してあるから理論的には問題ないが，モダリティという用語が近年いろいろ微妙に異なった意味に用いられているため，読者の錯覚や誤解をまねきかねないので，注意をようする。

よって，著者は文学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。